

今年の冬は例年に増して寒さが長く厳しかったように感じていましたが、このところ急に春の兆しが見えてきましたね。

先日の「劇場ごっこ」には、ご多用のなかにたくさんの方々にご来場いただきまして誠にありがとうございました。劇場ごっこ前から、お便り等でもお伝えしてきましたが、今年度はきらきら(2・3・4・5歳児)の取り組みを、少し変えました。これまでは、絵本などのもともあるお話をもとに、劇づくりを行ってきていましたが、今年は、そのもとになるお話作りから子どもたちと行いました。「子どもたちとお話作りをする」というと、「初めから終わりまで子ども達がストーリーを考えたの?」と誤解される方がいらっしゃるかもしれません。正確には、子ども達の遊びの様子、着想にヒントを得て、保育者がちょこっと仕掛けて、そこからまた子どもたちのイメージが広がり、遊びが発展し、さらに保育者が仕掛けて、さらに子どもたちが…と、壮大なごっこ遊びを展開していき、その出来事を子どもたちと一緒に振り返って再現してみることから始め、少し劇らしく、どちらかというと即興劇に近いのですが、演じるというより、その世界に入って、ごっこを楽しむという感じで進めてきました。保育者側にとっては、「劇場ごっこを視野に入れた取り組み」としてのスタートでしたが、子ども達の想像力が日々膨らみ、次第に日常の保育でもごっこ遊びが展開されるようになるにつれ、「次はどうなるの?」「どうする?」と子ども達だけでなく、保育者側もドキドキ、ワクワクするようになり、日常の保育がますます楽しいものになりました。ですから、ストーリーが初めからあったわけではなく、子どもたちと大人で一緒に創ってきたものになったのです。

そもそも、園の行事は「日常の保育の延長上にあるべき」と考えているのですが、「劇をする」となると、どうしても「劇の練習」というふうになってしまう傾向があり、「日常の遊びの延長で」というのは、なかなか難しくなってしまう。昨年までも、その点には十分配慮しながら取り組みを行ってきたつもりでしたし、無理なく楽しく取り組んでこれたと思っていますが、他県の園の取り組みの様子などの情報を得た時に、わが園でも、もっと普段の遊びがそのまま「劇場ごっこ」に結びつくような形にできるのではないかと考えたことが発端でした。

また、ご存知のように、わが園では0・1歳クラスと2・3・4・5歳児クラスという異年齢保育を行っています。せっかく日頃、異年齢で過ごしているのに、「ぜひ取り組みも異年齢で行いたい」という思いもあり、そうなるに絵本や物語の脚本を選ぶのが、とても難しいという現状もありました。もともとあるお話にとらわれなければ、自由な発想で何でもできる!と思ったのです。

さらに、来年度から保育所保育指針が変わります。「子どもたちの教育」という面で、これまでのような「できるだけ多くの知識を子どもたちに伝えていく」という教育から、「答えのない問題にも挑み、解決していけるような人材を育てよう」というふうに変わっていきます。そのためには意欲を持って楽しみながら取り組む、想像力を働かせて取り組むとか、工夫する力、友だちと協力し合って考えるとか、最後までやり遂げようとする力、などが必要になってきます。もともとあるものを覚えるということも大事ですが、新たに創り出す、工夫する、みんなで考えるなどを大事にしていかなければならない…などなど。

こうしたいろんな思いがあって、職員間で話し合い、試行錯誤しながら取り組んできました。何より、子どもたち自身が楽しみながら取り組めることを大事に考えてきました。

何分、正解のないもの、目指すべき方向ですら、初めてのことで曖昧でしたが、終えてみて、子どもたちがその世界観にどっぷり浸かって、大人も一緒になってワクワクしながら、楽しめたものになったと思います。また、最後のサプライズでは、喜んだ子もいれば、怖くて泣いてしまった子もいましたが、次につながるものとなり、日々のけん玉修業もさらに盛り上がり、正に、日常の保育の延長上にある行事になったのではないかと思います。